

明治5年12月2日の翌日が、明治6年1月1日？

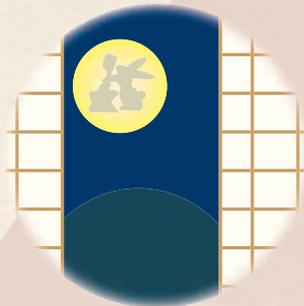
旧暦と新暦のはなし

現在、日本をはじめ世界各国で用いられている暦(=新暦)はグレゴリオ暦という太陽暦で、1年を365日とする暦です。400年間に97回のうるう年を置いて、その年を366日としています。これは400年間における1年の平均日数を365.2425日にするためです。グレゴリオ暦は旧暦から改暦されたあとの新しい暦ということで、“新暦”とも呼ばれます。

日本の旧暦は、「天保暦」です。天保暦は今なお占いや伝統行事などで用いられており、旧暦、もしくは陰暦の俗称で用いられております。正しくは、「てんぽうじんいんげんれき天保壬寅元暦」といいます。この天保暦は日本最後の太陰太陽暦で、徳川幕府より命じられた天文方しづかわかげすけ渋川影佑らにより天保13年(1842)に完成し、弘化元年(1844)から用いられました。太陰太陽暦としては最も精密なもので、二十四節気ていきまぼうを決定するのに定気法を用いました。

明治5年(1872)には日本でも旧暦の11月9日に新暦への移行が布告され、明治5年12月2日(旧暦)の翌日が、明治6年1月1日(新暦)になりました。旧暦の年初は、新暦の2月4日頃(立春)を基準にして前後15日頃の間に来ていましたので、日付は現在と比べて約20~50日くらい違っていたことになります。

暦のなかで“立春”や“夏至”などの季節を表す言葉は「二十四節気」といい、1年を春夏秋冬の4つの季節に分け、さらにそれぞれを6つに分けたものです。「節(節気)」と「中気(気)」が交互に並び、中気のない月をうるう月としていました。



二十四節気まとめ

季節	節月	せつ節	ちゅうき中気
春	一月	立春 (2月4日頃)	雨水 (2月19日頃)
	二月	啓蟄 (3月6日頃)	春分 (3月21日頃)
	三月	清明 (4月5日頃)	穀雨 (4月20日頃)
夏	四月	立夏 (5月5日頃)	小満 (5月21日頃)
	五月	芒種 (6月6日頃)	夏至 (6月21日頃)
	六月	小暑 (7月7日頃)	大暑 (7月23日頃)
秋	七月	立秋 (8月8日頃)	処暑 (8月23日頃)
	八月	白露 (9月8日頃)	秋分 (9月23日頃)
	九月	寒露 (10月8日頃)	霜降 (10月24日頃)
冬	十月	立冬 (11月7日頃)	小雪 (11月22日頃)
	十一月	大雪 (12月7日頃)	冬至 (12月22日頃)
	十二月	小寒 (1月5日頃)	大寒 (1月21日頃)

※ 国立国会図書館HPを元に製作